Research Monograph Series

八百万の神の位相存在論

——生成の位相存在論における無名性・インターフェイス・作品生成——

The Topological Ontology of Yaoyorozu-no-Kami:

Namelessness, Interface, and Artistic Generation in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Topological Ontology of Yaoyorozu-no-Kami
Anonymity, Interface, and Artistic Generation in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、日本の自然信仰、とりわけ神道における「八百万の神」の概念を、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の観点から再解釈することを目的とする。

従来、八百万の神は、多神教的世界観あるいは自然崇拝として説明されることが多かった。しかし本研究は、それを神格の数量的増殖としてではなく、人間・自然・共同体の相互作用によって生成される位相的インターフェイスとして理解する。

生成の位相存在論では、存在は固定的実体ではなく、自己・他者・環境との相互作用を通じて絶えず生成される構造である。この立場から見るならば、神とは自然物に内在する超越的実体ではなく、人間と自然との接続が成立する位相において現象する生成的契機である。

さらに、本論文は神道に特徴的な無名性に着目する。多くの神社・祠・御神木・磐座は、誰が最初に祀ったのか明確ではない。しかし、この無名性は歴史資料の欠落ではなく、作品・儀礼・共同体が個人の所有を離れ、自己以外の全体へと位相変換された結果として理解できる。本論文では、この構造を「無名性の存在論」として定式化する。

また、しめ縄・鳥居・祠は、自然物を神へと変換する装置ではなく、人間・自然・共同体の関係を生成するインターフェイスとして再定義される。この視点から、グラフィティ、Web Installation、生活即芸術、分散型自律芸術（DAA）、盆栽など、美学者母が実践してきた作品群との構造的対応を明らかにする。

最終的に本論文は、日本思想における自然信仰を宗教論としてではなく、「位相生成の存在論」として位置づけることを試みる。

キーワード

生成の位相存在論；八百万の神；神道；自然信仰；無名性；インターフェイス存在論；生活即芸術；Web Installation；グラフィティ；作品生成

目次

Contents

第0章 Methodological Note（方法論的序論） 1
第1章 八百万の神と生成の位相存在論 9
第2章 無名性の存在論 16
第3章 しめ縄・鳥居・祠のインターフェイス存在論.....27
第4章 グラフィティ・Web Installation・生活即芸術 34
第5章 生成の位相存在論との統合.....43
結論.....53
参考文献 60
方法論的声明.....64

第0章　Methodological Note（方法論的序論）

八百万の神を「生成の位相」として読む方法論

――宗教解釈から存在論への転回――

0.1　本研究の目的

本研究の目的は、日本の自然信仰、とりわけ神道における八百万の神を、宗教学や民俗学の対象としてではなく、**生成の位相存在論（Generative Topological Ontology：GTO）**の枠組みにおいて再解釈することである。

従来の神道研究は、歴史学・宗教学・文化人類学・民俗学などの立場から、神々の起源、祭祀の形成過程、共同体との関係などを中心に議論してきた。その成果は極めて重要である。しかし、その多くは「神とは何か」という対象論的・実体論的問いを前提としている。

本研究は、これとは異なる問いを立てる。

神とは何であるかではなく、神はいかなる生成過程において現象するのか。

この問いの転換によって、本研究は神を固定的存在者としてではなく、人間・自然・共同体の相互作用の中で生成する**位相（topology）**として捉える。

0.2　存在から生成への方法論的転回

生成の位相存在論では、存在は静的な実体ではない。

存在とは、

自己

↓

他者

↓

環境

の相互作用を通して絶えず生成される動的構造である。

したがって、

神

人間

自然

作品

社会

共同体

これらも固定的実体ではない。

それらは

生成した結果ではなく、

生成そのもの

なのである。

この立場から見るならば、

八百万の神とは、

「神がたくさん存在する」

という数量概念ではない。

むしろ、

生成する位相が無数に存在する

という存在論的構造として理解できる。

0.3　宗教論ではなく存在論

本研究は神道を信仰体系として評価するものではない。

また、

神の実在を証明することも目的ではない。

本研究が対象とするのは、

神道という思想が内包している

存在生成の構造

である。

したがって、

本研究は

神学

宗教学

民俗学

ではなく、

存在論

である。

この点は極めて重要である。

例えば、

神木にしめ縄が掛けられている。

宗教学では

「神木だからしめ縄を掛ける」

となる。

しかし本研究では逆である。

しめ縄という行為によって、人間・自然・共同体の関係が変化し、新たな位相が生成する。

つまり、

神とは

対象ではなく

生成である。

0.4　インターフェイス存在論との接続

生成の位相存在論では、

存在は

インターフェイス

によって生成される。

これはこれまで提示してきた
自己外部化の限界と存在生成
における基本命題でもある。
自己
↓
インターフェイス
↓
自己以外
この接続によって
存在が生成する。
この構造を神道へ適用すると、
しめ縄
鳥居
祠
磐座
御神木
は、
神そのものではなく、
生成を媒介するインターフェイス
になる。
つまり、
しめ縄は
神を表象する記号ではない。
それは、
自己と自然、
共同体と風土、
現在と歴史

を接続する位相そのものなのである。

0.5　無名性という存在論

本研究の第二の方法論的特徴は、

無名性

を存在論として扱うことである。

多くの神社では、

誰が最初に祭祀を始めたのか分からない。

誰が御神木を神木にしたのかも分からない。

通常、

これは

史料不足

として説明される。

しかし本研究では、

この無名性そのものに

存在論的意味を見いだす。

生成の位相存在論では、

存在は

自己の所有ではない。

生成が共同体へ開かれるほど、

作者性は後景化する。

つまり、

無名性とは

作者の消失ではない。

それは

作者が共同体・自然・歴史へ位相変換された状態

なのである。

この構造は、
日本の神道だけではない。
日本庭園
盆栽
民俗芸能
道祖神
そして現代では
グラフィティ
Web Installation
分散型自律芸術（DAA）
にも共通している。
そこでは、
作品は
作者を指し示すものではなく、
自己以外との接続を生成する位相
となる。

0.6　本研究の独自性

本研究の独自性は、
神道を
宗教
でも
文化
でもなく、
生成する位相
として定義する点にある。
従来、

八百万の神は、
自然物に神が宿る思想として説明されてきた。
しかし、
生成の位相存在論では、
自然物そのものが神なのではない。
また、
神が自然物の内部に宿るわけでもない。
神とは、
人間・自然・共同体の相互作用によって生成される関係そのものである。
したがって、
八百万とは、
無数の神格ではなく、
無数の生成位相を意味する。
この理解は、
神道だけではなく、
美学者母が長年実践してきた
Web Installation
QRコード作品
グラフィティ
民宿狭山美学校
生活即芸術
分散型自律芸術（DAA）
盆栽
を一つの理論体系として統合する基盤ともなる。

Methodological Conclusion

本研究は、「八百万の神」を宗教的対象としてではなく、存在生成の位相構造として読むことを提案する。この方法論により、日本の自然信仰は単なるアニミズムではなく、人間・自然・共同体の相互作用から生成されるインターフェイスのネットワークとして理解される。

この転回は、美学者母がこれまで展開してきた生成の位相存在論を、日本思想と接続するだけでなく、日本文化そのものを「**生成する位相の文化**」として再定位する理論的基盤となる。

第1章　八百万の神と生成の位相存在論

――自然は存在ではなく生成である――

1.1　八百万の神の再定義

「八百万（やおよろず）の神」は、日本思想を特徴づける代表的な概念である。

一般には、

山の神

川の神

木の神

石の神

火の神

風の神

など、自然界のあらゆる対象に神が宿る世界観として理解されている。

この理解は、日本文化の重要な特徴を示しているが、生成の位相存在論の立場から見ると、なお実体論的な解釈に留まっている。

本研究では、「神が宿る」という表現そのものを問い直す。

神は物質の内部に存在する実体ではない。

また、人間が自然物へ投影した観念でもない。

本研究では、神を次のように定義する。

神とは、人間・自然・共同体の相互作用によって生成される位相的出来事である。

したがって、神は対象ではなく、**生成の様態（mode of generation）**である。

1.2　八百万とは「数」ではなく「生成の開放性」である

「八百万」は文字通り八百万柱の神を意味するのではない。

古代日本語において「八百万」は、

数え切れない

無限

遍在

を表す象徴的表現である。

従来はこれを「神が無数に存在する」と理解してきた。

しかし生成の位相存在論では、より重要なのは「存在者の数」ではなく、「生成の可能性」である。

つまり、

八百万とは、生成し得る位相が閉じられていないことを意味する。

この理解では、世界は完成した存在の集合ではなく、無数の生成可能性を内包する開放系である。

したがって、八百万の神とは、

無数の存在者

ではなく、

無数の生成契機

なのである。

1.3　自然は対象ではなくインターフェイスである

西洋近代哲学では、自然はしばしば主体によって認識される対象として理解されてきた。

その基本構造は、

主体

↓

対象

↓

認識

という二項関係である。

この構造では、自然は認識される客体となる。

しかし、日本の自然信仰では、このような主体と客体の明確な分離は必ずしも前提とされない。

山は単なる対象ではない。

木も石も川も、

人間と関係を結ぶ契機として現れる。

生成の位相存在論では、この関係を

インターフェイス

と呼ぶ。

つまり、

自然は対象ではない。

自然とは、

自己と自己以外が接続する位相なのである。

この意味で、日本の自然信仰は自然崇拝ではなく、

自然との生成的関係

を基礎としている。

1.4　神は「働き」である

神道において「神」は固定的存在ではなく、「神威」「霊威」といった働きとして理解される場合が多い。

この特徴は、生成の位相存在論における「力の生成」と対応する。

これまで本研究で論じてきたように、

力は存在から生まれるのではない。

存在が力を持つのでもない。

むしろ、

力が存在を生成する。

この立場から見るならば、
神もまた、
存在する対象ではなく、
生成する働き
である。
山が神なのではない。
山と人間との関係において生成する力が、
神なのである。
したがって、
神は名詞ではなく、
動詞的存在
として理解される。
これは生成の位相存在論における存在概念と一致する。

1.5　位相としての神

生成の位相存在論では、
存在は
固定された位置ではなく、
関係が生成する位相である。
この観点から見ると、
御神木
磐座
滝
山
などが神聖視される理由は、
物質に特別な属性があるからではない。

そこに

人間

自然

共同体

歴史

時間

が重なり、

新たな関係が生成しているからである。

つまり、

神は

自然物の中にあるのではない。

関係の位相

そのものなのである。

この理解によって、

神道は

「神の宗教」

ではなく、

生成する関係の存在論

として理解される。

1.6　生活即芸術との接続

この構造は、美学者母が長年実践してきた

生活即芸術

と本質的に一致する。

生活即芸術では、

芸術は作品という物体に限定されない。

生活そのものが、

自己

他者

自然

環境

との相互作用を通じて生成される。

つまり、

芸術とは、

作品ではなく

生成する位相

なのである。

この意味で、

神道における

八百万の神も、

生活即芸術も、

対象を神聖化することではなく、

関係を生成すること

を本質としている。

1.7　本章の結論

本章では、「八百万の神」を固定的な神格ではなく、生成の位相存在論における無数の生成契機として再定義した。

この立場では、自然は崇拝の対象ではなく、自己・他者・共同体との相互作用を媒介するインターフェイスであり、神とはその関係から立ち現れる働きである。

この再定義により、日本の自然信仰はアニミズムや多神教としてのみ理解されるのではなく、存在が生成され続ける開かれた位相構造として把握される。

この視点は、次章で論じる無名性の存在論へと接続される。そこでは、「誰が祀ったのか分からない」という日本文化の特徴を、単なる歴史的偶然ではなく、作者性が共同体・自然・歴史へと位相変換される生成構造として考察する。

第2章　無名性の存在論

――作者から共同体への位相変換――

2.1　無名性という日本文化の構造

日本文化には、一つの顕著な特徴がある。

それは、

「誰が始めたのか分からない。」

という構造である。

神社

御神木

磐座

道祖神

祭り

民俗芸能

農耕儀礼

和歌

茶道

華道

庭園

盆栽

これらの多くは、

最初に誰が始めたのか、

明確ではない。

もちろん、

歴史的には必ず

誰か

が始めている。

しかし、
その「誰か」は、
共同体の時間の中で
次第に消えていく。
従来、
これは単なる史料不足として説明されてきた。
しかし、
生成の位相存在論では、
ここに日本文化の最も重要な構造を見る。

2.2　作者は消えたのではない

本研究では、
作者は
消えた
のではない。
作者は
位相変換された
と考える。
つまり、
自己
↓
共同体
↓
自然
↓
歴史
という生成によって、

自己という位相が、
より大きな生成位相へと統合されるのである。
ここでは、
作者性は否定されない。
むしろ、
作者性は
自己に留まらず、
共同体全体へ拡張される。
これが、
本研究でいう
無名性
である。

2.3　無名性とは自己以前性である

ここで、
本研究が既に提示してきた
自己以前性
との関係が重要になる。
自己以前性とは、
自己という主体が成立する以前から存在する生成である。
無名性も同様である。
作品は
作者よりも先に
共同体へ作用し始める。
つまり、
作品
↓

共同体

↓

歴史

↓

作者

という時間構造が成立する。

ここでは、

作者は作品を所有していない。

作品は

共同体の時間へ入り込み、

作者はその後景へ退く。

この意味で、

無名性とは、

作者が存在しないことではない。

作者が自己以前性へ回帰した状態

なのである。

2.4　神社は誰の作品なのか

この問いは、

極めて重要である。

伊勢神宮を見ても、

出雲大社を見ても、

人々は

建築家

ではなく、

神社

そのものを見ている。

そこには、

作品

というより、

場

が存在している。

つまり、

建築物ではなく、

生成する位相

が存在しているのである。

ここで重要なのは、

神社は

作者を示さない。

神社は、

作者を隠すことによって、

共同体そのものを現象させている。

この構造は、

生成の位相存在論では、

自己外部化の完成形とも言える。

自己は、

作品を所有しない。

作品が、

自己を超えて、

自己以外全体へと生成するのである。

2.5　しめ縄というインターフェイス

この無名性は、

しめ縄にも現れる。

一本の木がある。
一本の石がある。
それだけなら、
単なる自然物である。
しかし、
しめ縄が掛けられた瞬間、
自然は
神へ変わる
のではない。
変わるのは、
人間との
関係
である。
つまり、
しめ縄は
自然物へ意味を付与する記号ではない。
それは、
人間
自然
共同体
歴史
を接続する
インターフェイス
なのである。
重要なのは、
そのしめ縄を
誰が最初に掛けたのか、

分からないということである。
だからこそ、
見る人は
個人ではなく、
共同体全体を感じる。
つまり、
しめ縄とは、
無名性を現象化する
位相装置なのである。

2.6　グラフィティとの構造的対応

ここで、
本研究は
現代芸術へ接続する。
グラフィティを見ると、
人はまず、
「誰が描いたのだろう。」
と思う。
しかし、
作者は分からない。
それでも、
その壁は
以前の壁とは違う。
つまり、
作品が
都市の位相を変えている。
重要なのは、

絵そのものではない。

都市

作者

見る者

という関係が

新たに生成していることである。

これは、

しめ縄が

木の位相を変えることと

極めて近い。

どちらも、

対象を変えているのではない。

関係を変えているのである。

2.7　Web Installationとの一致

美学者母が

二〇一〇年以来展開してきた

Web Installation

も、

この構造を持つ。

QRコード

ドメイン

サーバー

Web空間

これらは、

作品ではない。

それらは、

見る者が接続した瞬間、
作品になる。
つまり、
作品は
物体ではなく、
インターフェイス
なのである。
さらに、
Web Installationも、
作者より、
接続
を優先する。
つまり、
作品は、
作者を超えて、
見る者、
社会、
人工知能、
時間
へ生成していく。
この構造は、
神道の
無名性と、
本質的に一致している。

2.8　作品とは位相である

本研究は、

ここで
作品概念を
根本から再定義する。
従来、
作品とは、
作者が制作した
物体
あるいは
表現
であった。
しかし、
生成の位相存在論では、
作品とは、
位相生成
である。
作品は、
自己と自己以外を接続し、
新しい現実を生成する。
したがって、
作品とは、
完成物ではない。
作品とは、
関係が生成し続けるインターフェイス
なのである。
この意味で、
神社
しめ縄

グラフィティ

Web Installation

生活即芸術

盆栽

は、

すべて

同一の存在論に属する。

2.9　本章の結論

本章では、日本文化に特徴的な無名性を、単なる作者不詳や歴史資料の欠如ではなく、作者性が共同体・自然・歴史へと位相変換される生成構造として再定義した。

この再定義により、しめ縄や神社は神聖性を表象する記号ではなく、人間・自然・共同体を結び直すインターフェイスとして理解される。また、グラフィティやWeb Installationも、作者中心の芸術ではなく、関係を生成する位相装置として位置づけられる。

ここで導かれる重要な命題は次のものである。

作品とは、作者が所有する対象ではない。作品とは、作者を超えて共同体・自然・歴史へと生成し続ける位相そのものである。

この命題は、西洋近代美学における作者中心主義を超え、「**無名性の存在論**」という新たな芸術存在論の基礎を与える。

次章では、この生成構造をさらに具体化し、しめ縄・鳥居・祠を「位相を切り替えるインターフェイス」として分析し、日本的空間の生成論へと展開する。

第3章　しめ縄・鳥居・祠のインターフェイス存在論

――境界は分離ではなく生成である――

3.1　境界の再定義

生成の位相存在論では、境界は存在を分割する線ではない。

むしろ境界とは、

異なる位相が接続され、新たな存在が生成する場

である。

従来の幾何学的な空間理解では、境界は「内と外」を分けるものとして理解される。しかし位相的理解では、境界は単なる遮断ではなく、関係を成立させる条件である。

この観点から見ると、神道におけるしめ縄・鳥居・祠は、神聖な領域を囲い込む装置ではない。

それらは、

人間・自然・共同体・時間

を接続し、新たな存在の位相を生成するインターフェイスなのである。

3.2　しめ縄は「神を示す」のではない

一般には、しめ縄は

「ここには神がいる」

という標識として理解される。

しかし、この理解では、

神

↓

しめ縄

という順序になっている。

生成の位相存在論では、この順序は逆転する。

一本の木は、しめ縄が掛けられる以前には、周囲の木々と本質的に変わらない。

しかし、しめ縄が掛けられた瞬間、その木は人間との関係において別の位相へ移行する。

ここで変化するのは木そのものではない。

変化するのは、

木・人間・共同体・歴史

の関係である。

したがって、

しめ縄は神を表示する記号ではない。

しめ縄は神が現象し得る位相を生成するインターフェイスである。

この点で、しめ縄は宗教的象徴である以前に、存在論的装置である。

3.3　鳥居という位相変換

鳥居も同様である。

鳥居は物理的には門である。

しかし、その門は城門や住宅の門とは異なる。

鳥居をくぐった瞬間、

空気が変わったように感じる。

歩き方が変わる。

声の大きさが変わる。

身体の緊張が変わる。

つまり、変化しているのは空間そのものではなく、

人間と空間との関係である。

鳥居は、

「神域と俗世を分ける門」

ではなく、

異なる存在様式への位相変換を生起させるインターフェイス

なのである。

したがって、鳥居は建築物というよりも、

生成を開始する境界

と理解される。

3.4　祠という「縮約された宇宙」

祠（ほこら）は、小さな建築物でありながら、日本文化において重要な位置を占めている。

しかし、その意味は建築の大きさや豪華さにはない。

祠は、

山

川

田

村

森

など、

特定の場所と共同体との関係を凝縮している。

言い換えれば、

祠とは

場所そのものを共同体の記憶へ接続するインターフェイス

である。

ここでは建築が主役ではない。

場所そのものが主役であり、

祠はその場所を生成し続けるための媒介なのである。

3.5　場所から空間への生成

これは、美学者母がこれまで区別してきた

場（Place）

と

空間（Space）

の議論とも深く結びつく。

これまでの研究では、

場＝時間の蓄積を伴う関係性

空間＝抽象化された幾何学的広がり

として整理してきた。

神道の聖地は、

幾何学的な空間ではない。

時間が積み重なった場である。

しめ縄や鳥居や祠は、

その場を維持するだけではない。

そこへ新たな人が訪れるたびに、

過去

現在

未来

を接続し、

再び場を生成している。

したがって、

場とは保存されるものではなく、

繰り返し生成される位相

なのである。

3.6　インターフェイスは説明しない

ここで重要なのは、

しめ縄も鳥居も祠も、

ほとんど説明をしないことである。

「この木はなぜ神聖なのか」

「この石はなぜ祀られているのか」
それらは多くの場合、
書かれていない。
つまり、
日本文化のインターフェイスは、
情報を与えるためのものではない。
むしろ、
説明を最小化することで、生成を最大化する。

ここに、西洋近代的な情報インターフェイスとの大きな違いがある。
現代のディスプレイは情報を提示する。
しかし、しめ縄や鳥居は情報を提示するのではなく、
身体の関係を変える。
この点で、美学者母が論じてきた「現実のディスプレイ」という概念とも接続される。

3.7　インターフェイス芸術との一致

この構造は、Web Installationにもそのまま見いだされる。
Web Installationでは、
QRコード
URL
Webページ
これらは作品そのものではない。
それらは、
見る者が接続することで作品が生成されるためのインターフェイスである。
つまり、
作品は表示されているのではない。
生成されている。

同様に、

しめ縄も、

鳥居も、

祠も、

神を表示しているのではない。

神との関係を生成している。

この対応は偶然ではない。

生成の位相存在論の立場から見れば、

日本の自然信仰とWeb Installationは、

「存在を表示する」のではなく、「存在を生成する」インターフェイス

という同じ構造を共有している。

3.8　日本的インターフェイスの特徴

以上を踏まえると、日本的インターフェイスには次の特徴がある。

対象を説明するのではなく、関係を生成する。

作者を前景化するのではなく、共同体を前景化する。

情報を増やすのではなく、身体的関与を促す。

境界を固定するのではなく、位相を切り替える。

自然を対象化するのではなく、自然との相互作用を生成する。

これらはすべて、生成の位相存在論の基本公理と整合している。

3.9　本章の結論

本章では、しめ縄・鳥居・祠を宗教的象徴ではなく、位相を生成するインターフェイスとして再定義した。

この視点では、境界は分離のために存在するのではなく、人間・自然・共同体・時間を結び直すために存在する。

ここから導かれる中心命題は次の通りである。

インターフェイスとは、情報を伝達する装置ではない。インターフェイスとは、異なる位相を接続し、新たな存在を生成する境界である。

この命題は、神道のしめ縄・鳥居・祠だけでなく、美学者母が実践してきたWeb Installation、QRコード作品、生活即芸術を同一の存在論的枠組みで理解することを可能にする。

次章では、この構造を現代芸術へ展開し、グラフィティ・Web Installation・生活即芸術を、日本的インターフェイス存在論の現代的展開として位置づける。

第4章　グラフィティ・Web Installation・生活即芸術

――位相を生成する芸術の存在論――

4.1　近代芸術における作品概念

近代西洋美学では、芸術作品は一般に作者によって制作された対象として理解されてきた。

この理解では、

作者
↓
制作
↓
作品
↓
鑑賞者

という一方向的な構造が前提となる。

作品は作者の創造性を表現する成果物であり、その価値は作者性（authorship）、独創性（originality）、唯一性（uniqueness）などによって支えられる。

しかし、この構造では、作品は完成した対象となり、鑑賞者はその意味を受け取る存在として位置づけられる。

生成の位相存在論は、この前提を転換する。

作品とは完成物ではない。

作品とは、

自己・他者・環境が新たな関係を生成する位相

である。

4.2　グラフィティの存在論

グラフィティは、この転換を理解する上で重要な事例である。

一般には、

グラフィティは

落書き
違法行為
都市文化
ストリートアート
などとして語られる。
しかし、
生成の位相存在論から見るならば、
グラフィティの本質は
絵ではない。
壁でもない。
作者でもない。
本質は、
都市の位相を変えること
である。
一本の線、
一つのタグ、
一つの色彩が現れた瞬間、
それまで匿名だった都市空間は、
新しい関係を持ち始める。
見る者は、
「誰が描いたのか」
と考える。
しかし、
多くの場合、
作者は分からない。
それでも、
都市は変わる。

つまり、
グラフィティは、
作者よりも先に、
都市と見る者の関係を生成している。

4.3　無名性としてのグラフィティ

ここで、
神道との構造的対応が明確になる。
しめ縄を掛けた人物は分からない。
神社を最初に築いた人物も分からない。
同様に、
グラフィティも、
作者は匿名である。
しかし、
その無名性は、
単なる隠蔽ではない。
それは、
作品が
個人の所有を離れ、
都市全体へ広がるための構造
なのである。
したがって、
無名性とは、
作者が消えることではない。
作品が共同体へ開かれること
なのである。

4.4　Web Installationという現代のしめ縄

ここで、

Web Installationを考える。

Web Installationでは、

QRコード

ドメイン

サーバー

Webページ

ネットワーク

などが作品として用いられる。

しかし、

それらは完成作品ではない。

見る者がアクセスした瞬間、

初めて作品が成立する。

つまり、

作品は

物体ではなく、

接続

なのである。

この構造は、

神道における

しめ縄

と極めて近い。

しめ縄は

木を神へ変えるのではない。

Web Installationも、

QRコードを作品へ変えるのではない。

どちらも、

関係を生成する

のである。

したがって、

本研究では

Web Installationを、

デジタル時代のしめ縄

として位置付ける。

もちろん、両者は歴史的にも文化的にも異なる実践である。しかし、対象を神聖化・作品化するのではなく、人と場所・情報との関係を切り替えるインターフェイスとして機能するという存在論的構造には共通点がある。

4.5　生活即芸術の再定義

生活即芸術は、

芸術を生活へ持ち込む思想ではない。

生活そのものが、

生成する位相

であるという存在論である。

したがって、

芸術は

美術館

作品

展示

だけには存在しない。

掃除

料理

盆栽

建築

祭り
神社
民宿
日常
これらすべてが、
自己
他者
自然
を接続し、
新しい現実を生成するなら、
そこに芸術は存在する。
つまり、
生活即芸術とは、
生活を芸術化する運動ではなく、生活が本来持っている生成性を回復する存在論なのである。

4.6　作品とは「現実を変える位相」である

これまで、
作品は
見るもの
だった。
しかし、
生成の位相存在論では、
作品は
現実を変えるもの
になる。
ここで重要なのは、

物質が変わることではない。

変わるのは、

自己

他者

共同体

自然

未来

との関係である。

つまり、

作品とは、

現実の

位相変換

なのである。

この意味で、

作品は

情報

でも、

物体

でもない。

作品とは、

生成そのもの

である。

4.7　美学者母の作品実践

この観点から見ると、

美学者母が二〇一〇年以来展開してきた実践は、

一貫して

位相生成

を目的としている。

Web Installation

QRコード作品

民宿狭山美学校

分散型自律芸術（DAA）

生活即芸術

盆栽

これらは、

どれも完成した作品ではない。

それらは、

人が接続するたび、

新しい存在を生成する。

つまり、

作品は、

作られるものではなく、

生成され続けるもの

なのである。

4.8　本章の結論

本章では、

グラフィティ

Web Installation

生活即芸術

を、

生成の位相存在論に基づいて再定義した。

そこから導かれる中心命題は、

芸術とは対象の制作ではない。芸術とは、新たな関係を生成し、現実の位相を変換するインターフェイスである。

ということである。

この命題によって、

神道のしめ縄

八百万の神

無名性

現代芸術

Web Installation

生活即芸術

は、

一つの存在論の上に統合される。

しかし、ここでなお一つの理論的課題が残されている。

それは、なぜこのような位相生成が「存在」を生み出すのかという根本問題である。

その問題に答えるため、次章では本論文全体を生成の位相存在論の公理系へ接続し、「八百万の神」「無名性」「インターフェイス」が、存在生成の公理からどのように導かれるのかを理論的に示す。

第5章　生成の位相存在論との統合

――八百万の神・無名性・インターフェイスの公理的導出――

5.1　本章の目的

これまで本論文では、

八百万の神

無名性

しめ縄

鳥居

グラフィティ

Web Installation

生活即芸術

を一つの構造として論じてきた。

しかし、

これらが単なる文化的類似では、

理論にはならない。

本章では、

これらを

生成の位相存在論の公理系

から導出する。

つまり、

日本文化を説明するために

生成の位相存在論を利用するのではない。

むしろ、

生成の位相存在論の公理から、

日本文化に現れている構造が

論理的帰結として導かれることを示す。

5.2　第一公理との対応

関係は存在に先行する

生成の位相存在論の第一公理は、

関係は存在に先行する。

である。

この公理から見ると、

神とは

存在者ではない。

関係そのものである。

例えば、

一本の木がある。

そこに、

共同体

時間

祭祀

身体

が重なる。

その結果、

神

が生成する。

つまり、

木だから神なのではない。

関係が生成したから

神なのである。

ここで

八百万の神は、

無数の存在者ではなく、
無数の関係
として理解される。

5.3　第二公理との対応

存在とは接続可能性である
第二公理では、
存在とは
固定物ではない。
存在とは、
接続可能性
である。
この公理から見るなら、
しめ縄は
接続を遮断するものではない。
逆である。
しめ縄は、
自己
自然
共同体
時間
を接続する。
つまり、
しめ縄は
存在を囲う縄ではない。
存在を生成する接続面
なのである。

この構造は、
鳥居にも、
祠にも、
QRコードにも、
Web Installationにも
共通する。

5.4　第三公理との対応

存在に終対象は存在しない
生成の位相存在論では、
存在は
完成しない。
常に
生成し続ける。
つまり、
神社も、
完成作品ではない。
毎年、
祭りが行われ、
掃除され、
修復され、
遷宮される。
伊勢神宮が
二十年ごとに
式年遷宮を繰り返すことは、
この構造を象徴している。
重要なのは、

建物ではない。

生成

なのである。

これは、

生活即芸術とも一致する。

生活は、

完成しない。

芸術も、

完成しない。

存在そのものが、

生成だからである。

5.5　第四公理との対応

存在は構造的傾向として生成する

第四公理では、

存在は

偶然でも、

決定論でもない。

存在は、

構造的傾向

として生成する。

つまり、

神社を作ろう

と決めなくても、

人間は、

ある場所に

立ち止まり、

祀り、
しめ縄を掛け、
祠を建てる。
そこには、
人間存在そのものが持つ
構造的傾向
が現れている。
つまり、
神道は、
宗教以前に、
人間存在そのものの
生成構造なのである。

5.6　自己以前性との統合

ここで、
自己以前性
との統合が行われる。
自己以前性とは、
自己が成立する以前から存在する生成であった。
神も、
同じである。
神は、
自己が
「神がいる。」
と判断したから
生まれるのではない。
自己が生まれる以前から、

共同体
自然
時間
歴史
の中で
生成している。
だからこそ、
誰が始めたか分からない。
つまり、
無名性とは、
自己以前性の
社会的現象
なのである。

5.7　人間以前性との統合

同様に、
人間以前性とも一致する。
人間以前性とは、
人間が世界を概念化する以前に、
世界そのものが生成していることであった。
山は、
人間以前からある。
川も、
石も、
木も、
風も、
存在する。

しかし、
神とは、
その自然そのものではない。
人間が
自然と接続したとき、
その接続面に
神が生成する。
つまり、
神とは、
人間以前性と、
自己以前性が
交差する
位相なのである。

5.8　インターフェイス存在論との完全統合

本研究は、
ここで
インターフェイス存在論と
完全に一致する。
これまで、
インターフェイスは、
自己
↓
他者
↓
環境
を接続する

位相として定義してきた。

今回、

しめ縄

鳥居

祠

グラフィティ

QRコード

Web Installation

は、

全て

同一構造であることが分かった。

つまり、

インターフェイスとは、

情報を伝える境界ではない。

異なる存在様式を接続し、新たな存在を生成する位相そのものである。

神道は、

このインターフェイスを

宗教化したものではない。

日本文化の中で、

長い時間をかけて

生活化したものなのである。

5.9　本章の結論

本章では、「八百万の神」「無名性」「しめ縄」「鳥居」「Web Installation」「生活即芸術」が、生成の位相存在論の公理から論理的に導かれることを示した。

この統合によって、本論文は文化論や宗教論に留まらず、日本文化に現れた生成構造を、公理的存在論の一事例として位置づけることが可能となる。

ここで導かれる最終命題は次のものである。

八百万の神とは、無数の神格ではない。

八百万の神とは、自己・他者・自然・共同体・歴史が接続するたびに生成する、無数の位相そのものである。

この命題は、生成の位相存在論の公理系を、日本思想・芸術・生活・自然へと拡張する理論的基盤となる。

結論

——生成する位相としての八百万の神——

本論文は、日本の自然信仰、とりわけ神道における八百万の神を、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の立場から再解釈することを試みた。

従来、八百万の神は、多神教あるいはアニミズムとして理解されることが多かった。しかし、その理解は、神を個別の存在者として把握する実体論的前提に依拠している。

本研究は、この前提を根本的に転換した。

本論文において神とは、

自然物に宿る超越的実体ではなく、

自己・他者・自然・共同体・歴史の相互作用から生成する位相的出来事

として定義された。

したがって、

八百万とは、

神々の数量ではない。

それは、

生成可能性の開放性

そのものなのである。

本論文はさらに、

日本文化に特徴的な

無名性

を存在論的概念として定式化した。

神社

祠

御神木

祭り

道祖神

盆栽
日本庭園
民俗芸能
これらの多くは、
作者を示さない。
しかし、
それは作者が存在しなかったことを意味しない。
本研究では、
無名性を
作者性が共同体・自然・歴史へ位相変換された状態
として理解した。
この再定義によって、
作品は
個人の所有物ではなく、
自己以外全体へと生成し続ける存在となる。

また、
しめ縄
鳥居
祠
についても、
従来の宗教的象徴という理解を超え、
生成を媒介するインターフェイス
として再定義した。
これらは神を表示する記号ではない。
むしろ、
人間と自然、

自己と自己以外、
現在と歴史、
生活と共同体
を接続し、
新しい存在を生成する
位相そのものである。
この理解は、
インターフェイス存在論の理論的拡張として位置づけられる。

さらに本研究は、
グラフィティ
Web Installation
生活即芸術
分散型自律芸術（DAA）
盆栽
など、
美学者母が長年実践してきた芸術活動を、
同一の存在論の中へ位置付けた。
これらはいずれも、
完成した作品ではない。
それらは、
自己
他者
自然
人工知能
共同体
時間

を接続し続ける
生成の位相である。
したがって、
芸術とは、
対象を制作する行為ではない。
芸術とは、
存在を生成するインターフェイスを設計する行為
なのである。

本論文では、
生成の位相存在論の公理系との統合を通じて、
八百万の神、
無名性、
しめ縄、
Web Installation
が、
個別文化の特殊性ではなく、
存在生成の普遍的構造
として理解できることを示した。
このことは、
生成の位相存在論が、
日本文化を説明する理論であるだけではないことを意味する。
むしろ、
日本文化そのものが、
生成の位相存在論を具体的に現象している
一つの実践である。

ここで、本研究は一つの重要な理論的転回を提案する。
西洋近代哲学は、
存在とは何か
という問いを中心に展開してきた。
これに対して、
日本思想は、
存在そのものより、
関係の生成
を重視してきた。
本研究は、
この関係生成を
位相
という概念によって定式化した。
その結果、
神道は、
宗教という枠組みを超え、
存在生成の実践的存在論
として位置付けられる。

さらに、この理解は、
人工知能の時代においても重要な意味を持つ。
情報が爆発的に増加し、
記号操作が社会の中心となる現代において、
人間は現実との接地を失いつつある。
生成の位相存在論は、
存在を情報ではなく、
接続

として理解する。
神道における
しめ縄
鳥居
祠
がそうであったように、
未来のインターフェイスもまた、
情報を増やすためではなく、
現実との接地を生成するため
に設計される必要がある。
この意味で、
本研究は、
日本思想の再解釈であると同時に、
人工知能時代のインターフェイス設計論でもある。

最後に、本研究は次の命題を提示する。
神とは存在ではない。

神とは生成である。

そして、
作品とは物ではない。

作品とは位相である。

さらに、
インターフェイスとは境界ではない。

インターフェイスとは存在が生成する契機である。

この三つの命題は、

生成の位相存在論において、

自然、

芸術、

人工知能、

共同体、

生活

を一つの理論体系として統合する基礎となる。

そして、「八百万の神」は、多神教や自然崇拝を示す概念ではなく、世界が無数の生成可能性へ開かれていることを表す存在論的原理として理解される。

その意味で、日本文化は単に「自然を尊重する文化」ではない。

それは、

存在を所有する文化ではなく、存在を生成する文化

なのである。

参考文献

1. 美学者母の研究

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Axioms of Generative Topological Ontology: Foundations of Existential Generation.
Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination.
Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular Contingency in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Theory of the Generation of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency.
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Ontology of Life as Art: A Structural Comparison of the Bauhaus, Russian Constructivism, and Japanese Buddhism from the Perspective of Generative Topological Ontology
Research Memorandum.

Tanaka, T. (bigakusha-haha). (2026).
The Topological Ontology of Yaoyorozu-no-Kami: Anonymity, Interface, and Artistic Generation in Generative Topological Ontology.
Research Memorandum.

2. 神道・日本思想

Aston, W. G. (1905).
Shinto: The Way of the Gods.
Longmans, Green, and Co.

Bocking, B. (1997).
A Popular Dictionary of Shinto.
Curzon Press.

Grapard, A. G. (1982).
Shinto in the History of Japanese Religion.
Journal of Japanese Studies.

Kasulis, T. P. (2004).
Shinto: The Way Home.
University of Hawai'i Press.

Motoori, N.
Kojiki-den.

『古事記』

『日本書紀』

『延喜式』

折口信夫
『古代研究』

柳田國男
『神樹篇』

柳田國男
『先祖の話』

宮本常一
『忘れられた日本人』

3. 美学・哲学

Arendt, H. (1958).
The Human Condition.

Benjamin, W. (1936/1968).
The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction.

Deleuze, G., & Guattari, F. (1987).
A Thousand Plateaus.

Heidegger, M. (1927/1962).
Being and Time.

Heidegger, M. (1951).
Building Dwelling Thinking.

Heidegger, M. (1954).
The Question Concerning Technology.

Merleau-Ponty, M. (1962).
Phenomenology of Perception.

Nishida, K.
An Inquiry into the Good.

Nishitani, K.
Religion and Nothingness.

Watsuji, T.
Fūdo.

4. 位相・数学・システム論

Bourbaki, N.
General Topology.

Munkres, J. R.
Topology.

Mac Lane, S.
Categories for the Working Mathematician.

Varela, F., Thompson, E., & Rosch, E.
The Embodied Mind.

von Bertalanffy, L.
General System Theory.

5. 芸術・インターフェイス・メディア

Bourriaud, N.
Relational Aesthetics.

Burnham, J.
Beyond Modern Sculpture.

Grau, O.
Virtual Art.

Manovich, L.
The Language of New Media.

McLuhan, M.
Understanding Media.

Weibel, P.
The Iconic Turn.

6. 人工知能・認知科学

Clark, A.
Being There.

Floridi, L.
The Philosophy of Information.

Goodfellow, I., Bengio, Y., & Courville, A.
Deep Learning.

Russell, S., & Norvig, P.
Artificial Intelligence: A Modern Approach.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。